デジタルカメラの  
基礎知識

# 写真撮影の三原則

失敗写真とはどのような写真のことでしょう。被写体にうまくピントが合っていないピンボケ写真や撮影時に手ぶれ（撮影者の手が動いてぶれてしまうこと）や被写体ぶれ（被写体が動いてぶれてしまうこと）で、いい表情が撮影できなかった写真、顔が暗くなってしまった写真などが失敗写真の例といえます。そのような失敗を防ぎ、上手に写真を撮影するには、「ピントを合わせる」「手ぶれを防ぐ」「光の向きを考える」という三原則があります。

## ピント

上手に写真を撮影する1つ目の原則は、「被写体にピントを合わせること」です。

ほとんどのデジタルカメラには、オートフォーカス（AF）機能が搭載されており、自動的に画面の中心にあるもの、または手前にあるものにピントが合うようになっています。そのため、被写体が中心から外れていたり、後方にあったりする状態で撮影すると、ピンボケしやすくなります。

ピント合わせのコツは、シャッターボタンを途中まで軽く押す「半押し」です。シャッターボタンを半押しすると、合わせたピントを固定しておくことができます。半押しを覚えると、画面の端にピントを合わせた写真も撮れるようになります。

### 手ぶれ

上手に写真を撮影する2つ目の原則は、「手ぶれを防ぐこと」です。

コンパクトデジタルカメラは、小さく、持ち運びに便利ですが、カメラが小さいため、シャッターを押すときにカメラが動いてしまい、写真がぶれてしまう「手ぶれ」が起こりやすくなります。

ほとんどのデジタルカメラには、この手ぶれを軽減する機能が付いているので、この機能を設定しておくとよいでしょう。

### 光の向き

上手に写真を撮影する3つ目の原則は、「光の向きを考えること」です。

光の向きには次のようなものがあります。

順光

被写体の正面から光が当たる状態です。正面から全体に光を当てることで被写体に影ができにくくなりますが、質感を出しにくいため単調な写真になることもあります。

サイド光

被写体の左右から光が当たる状態です。被写体の輪郭や質感を強調することができますが、明暗差のはっきりした影ができるため、きつい感じの写真になることもあります。

逆光

被写体の背中から光が当たる状態です。被写体の正面が影になるため暗くなりますが、被写体をシルエットとして浮き立たせる効果もあります。

# デジタルカメラの持ち方

デジタルカメラで撮影するときは、しっかりとデジタルカメラを両手で持ちましょう。

デジタルカメラは手のひら全体を使ってしっかり持ちます。こうすることで、シャッターボタンを押す瞬間にデジタルカメラが動いてしまうのを防ぐことができます。

デジタルカメラを持つ場合は、次のような点に注意します。

* フラッシュやレンズに指が掛からないように持つ
* 両手でしっかりと固定する
* デジタルカメラの付属品にストラップがある場合は落下防止のため利用する
* 足を肩幅程度に開き、少し膝を曲げたり足を前後に開いたりして下半身を安定させる

**Point　を使い分けよう**

デジタルカメラは、撮影したいものに合わせて撮影モードを切り替えて使うことができます。まずは、近くのものをきれいに撮りたいときに便利な「マクロモード」、夜景を撮りたいときに便利な「夜景モード」の2つを使いこなせるようになるといいですね。

**夜景モード**

光輝くきれいな夜景を撮影したのに、撮影結果を見ると、全体的に暗くなってしまって光が見えないということがあります。このような場合は、「夜景モード」を使います。ただし、夜景を撮影するには、カメラをしっかりと固定した状態で撮影する必要があるので、三脚などを利用しましょう。また、光を補うためのフラッシュは、夜景撮影の場合は反対に光を打ち消してしまいます。フラッシュは発光禁止にして撮影しましょう。

**マクロモード**

花や昆虫、鳥など小さい被写体を撮影する場合に、できるだけ近づいて大きく撮影したり、部分的に拡大して撮影したりすることがあります。しかし、被写体にデジタルカメラを近づけすぎると、ピントが合わずに被写体がぼけてしまいます。これは、レンズに「最短撮影距離」があり、この距離より近い位置から撮影しようとすると起こる現象です。このような場合は、「マクロ（接写撮影）モード」を使うと、接写撮影してもピントが合って、きれいに撮影できます。